

理学療法を取り巻く学際領域と理学療法士の研究活動について、その枠組みとともに、法律・経営学、教育、保健・社会福祉、建築学、解剖・組織学、生体工学、行動科学との関連や接近について、理学療法士として現在ご活躍の先生方にご執筆いただきました。

理学療法の裾野の広さと奥深さを再認識するとともに、理学療法士の専門性と臨床に役立つ研究の指向性について考える契機となれば幸いです。

■理学療法を取り巻く学際領域(潮見泰蔵, 他論文)

本稿では、「学際性」という視点から、理学療法の成立過程とその方向性について概観した。冒頭では筆者らの科学観について、「人間科学」と理学療法の関係を述べたうえで、理学療法と近接した学問領域との関係および現今の理学療法における課題と方向性について論述した。更に、近接の学問領域の例として「人間工学」を取り上げ、研究の対象やそのについて紹介した。

■理学療法における労務管理(岩月宏泰論文)

理学療法における組織マネジメントの問題を法律学および経営産業心理学の立場から研究するうえでの視点を提示した。法律学の立場からは理学療法士法・作業療法士法の改正の必要性、医療過誤事件、労働法上の諸問題を、経営産業心理学の立場からはワーク・モチベーション、変革的リーダーシップのモデルおよび職場ストレスの尺度について説明した。病院における理学療法士の組織は硬直化現象がみられることから、組織活性化を推進するためのマネジメントが重要といえる。

■理学療法学教育研究における現状と今後の展開方法(清水和彦, 他論文)

研究を行うには、目的、方法が明確化される必要がある。理学療法学教育領域の研究対象を押さえるために関係雑誌掲載記事を採集し、KJ法を用いて整理した。また、教育研究では、対象の全体像のみならず個別の動向も把握することが重要となるため、教育関連領域でもっと利用することが望まれる多変量解析の一部を紹介した。

■理学療法と社会福祉(香川幸次郎, 他論文)

理学療法と社会福祉の関連を、保健福祉学の観点からとらえなおし、健康関連 QOL の力動モデルを提示するとともに、研究の枠組みと研究課題を論述し、保健福祉学と理学療法との共同研究の可能性を示唆した。

■理学療法における保健学的接近—システムの接近の必要性—(木村 朗論文)

個別対応では解決できない理学療法上の問題にこたえるものが、システムの手法やオッズ比分析を手がかりとした保健学的手法である。疫学を基礎に、教育を手段に、時に政策立案にまで言及することで人の健康に関する問題解決を図るのが保健学の目的で、リハビリテーションと理学療法も当然含まれる。個別的対応の限界を見据えたアプローチこそ、保健学的接近の第一歩となる。

■理学療法における建築学的接近(浅賀忠義論文)

建築学との学際領域における理学療法の研究の指向性について概説を試みた。まず、障害構造論における環境因子の位置づけと、対象とする環境の一般的な側面について示した。次に、建築計画系の空間構成に関する先行研究について概観したうえで、両分野の学問的視点の相違に焦点をあてて、動機づけにおける誘因を視点としたアプローチの有効性と、個性性を重視した生活環境整備面での成果蓄積の必要性について述べた。

■理学療法における生体工学的接近(原 和彦論文)

理学療法学は、基礎科学をはじめ医学、生物学、諸工学などを統合化した学際領域と、臨床治療経験から得た実証的研究を基に発展してきた。その中でも、力と運動との関係を明らかにしようとする生体力学的手法は基礎・臨床・研究における基礎科学として必要であり、今後の理学療法における生体工学的接近法として発展する領域である。

■理学療法における解剖学とその研究(弓削 類論文)

21世紀は、学術、文化、社会のすべてがグローバル・スタンダードの名のもとにその基準が変化する時代となる。その大きな波のなかで、理学療法学的研究とその研究手法は、どのような方向へ進むのであろうか。おそらく更に専門性が進み、研究の多様化と高度化がおこるものと推測される。解剖学の世界に入った筆者が、理学療法士の立場からみた解剖学と解剖学的研究について雑感を述べた。

■理学療法における筋組織学的接近(坂本美喜, 他論文)

組織学的観察は、筋細胞の構造上の変化を観察できるため、筋力の低下等が生じている要因を客観的に理解できる。更に強化した筋の回復の可能性や運動負荷自体が及ぼす侵襲の可能性を判断するうえで貴重な根拠となる。筋組織学的評価が、患者の的確な目標設定をはかるうえでの一助となることが望ましい。

■理学療法における行動科学的接近(辻下守弘, 他論文)

理学療法士は、急増する慢性疾患のケアを担う中心的存在であり、今後社会のニーズもますます大きくなるであろう。しかし、理学療法士がその期待に応えるためには、医学の呪縛から逃れ学際的なアプローチを取り入れるべきであり、行動科学はその有力な手段となるであろう。しかし、理学療法の臨床における心理社会的問題を扱った報告は散見するほどしかなく、大部分は自然科学的研究手法を用いた生物学的、医学的な研究報告で占められている。そこで本稿では、行動科学の概要を紹介し、なぜ行動科学が必要なのかを具体的に解説し、理学療法において行動科学的研究を早急に導入すべき課題を示した。